

言語使用の評価を通してみる習慣化された言語管理の軌道：言語学的エスノグラフィーと接触場面研究の親近性をめぐって

著者	村岡 英裕
雑誌名	Global communication studies = グローバル・コミュニケーション研究
号	4
ページ	141-168
発行年	2016-09
URL	http://id.nii.ac.jp/1092/00001415/

言語使用の評価を通してみる習慣化された言語 管理の軌道¹⁾

——言語学的エスノグラフィーと接触場面研究の親近
性をめぐって——

村 岡 英 裕

The Trajectory of Accustomed Language Management as Reflected by Evaluations towards Language Use: On the Close Relationship between the Studies of Linguistic Ethnography and Contact Situations

Hidehiro MURAOKA

The aim of this paper is twofold. Firstly, it aims to demonstrate the close relationship between the study of contact situations (cf. Neustupný, 1985a) and linguistic ethnography which has been developed mainly by scholars in countries of the European Union (cf. Rampton, 2005; Blommaert, 2010). Secondly, based on a case study using the ethnographic approach, this paper demonstrates how accustomed language management is developed by examining the trajectory of accumulated evaluations towards language use made by foreign residents after their arrival in Japan. It is suggested in this paper that the study of contact situations can be further developed by integrating the ethnographic and diachronic points of view.

キーワード： 習慣化された言語管理、軌道、評価、言語学的エスノ
グラフィー、言語バイオグラフィー

1. はじめに

従来さまざまなところで論じられてきたように、言語管理理論 (Neustupný, 1994, 1985a, 1985b; Jernudd and Neustupný, 1987) に基づく接触場面研究は、理論的にはハイムズのコミュニケーションのエスノグラフィー (cf. Hymes, 1974) を発端としながら、言語接触論からのパラダイム・シフトによって、言語問題への新たな視点と研究方法を提示してきた。具体的には、接触場面の概念を提唱した Neustupný (1985a) では、(i) 内的場面とは区別されるべき接触場面にも同等の焦点を当てること、(ii) 接触言語に関して、生成と対になる訂正(後に言語管理)のプロセスを扱うこと、(iii) 言語体系の変化や言語計画の基礎になる談話のレベルを最も重要な研究対象とし、参加している当事者の主体性を扱うこと、(iv) 狭い意味の言語だけでなく、文法外のコミュニケーション能力を視野に入れること、を挙げている。また、村岡(2006: 105)では接触場面研究の位置づけを論じて、接触場面研究は「場面研究として文化内と文化間の二項対立とその融合、参加者間の相互行為プロセス、言語以外の要素(社会言語学的諸要素ないし文法外コミュニケーション要素)などを重視し、プロセスとバリエーションに関心を払う社会言語学として理解しなければならない」と指摘した。

こうした特徴をもつ社会言語学は、ここ20年ほどの間に急速に市民権を得てきており、言語人類学 linguistic anthropology (e.g. Duranti, 1997; Goodwin and Goodwin, 1992)、さらに言語学的エスノグラフィー linguistic ethnography (e.g. Blommaert, 2010; Rampton, 2005) として研究が蓄積されてきている。

本稿では、言語学的エスノグラフィーと接触場面研究の親近性を指摘し、その成果の一部を参照しながら、移動する人々としての外国人住民の言語バイオグラフィー・インタビューから、彼らの語りのなかに現れた言語使用に関する原則と評価がどのような習慣化された言語管理 (e.g. Fan, 2015; 高, 2010; 村岡, 2010a) の軌道によって形成されてきたのかについて記述を試みる。

2. 主体性・個別性を重視した社会言語学

2.1. ‘Joseph’の言語レパトリー

Blommaert (2010: 154–173) に言語学的エスノグラフィーによって重視される観点を説明する印象的な難民申請者の言語レパトリーの研究がある。そこではツチ族と穏健派フツ族とが虐殺された 1994 年のルワンダの虐殺 (cf. 武内、2000) 前後から苛烈な社会環境を生き延びてイギリスに難民申請するに至った Joseph という少年がどのような言語レパトリーを蓄積するに至ったかを語る上申書が分析されている。そして、マジョリティの立場からの国家・民族と母語の関係、そこで前提とされている言語と空間的な支配の関係、さらには時間軸に対する関心のなさなどのために、いかにイギリス内務省が Joseph の上申書を読み間違えることになったのかが論証されている。以下、長くなるが、その概要を紹介する。

Joseph はルワンダの首都 Kigali に 1986 年にフツ族として生まれる。父は政治家で、母はツチ族のビジネスマンであった。母とともに彼はケニアに移り、英語による保育園に通いながら、Kigali との間を行き来していた。保育園の子供から Swahili 語を少し学んだ。Kigali にいるときは、家族は英語を使用し、周囲との交友が禁止され、メイドから少しだけ Kinyarwanda 語²⁾を学んだ。1992 年、5 才のときにルワンダに戻ったが、すぐに母親が殺される。虐殺が始まり、Joseph は逃走して助かったが、家にいた父親や兄弟は全員殺害された。その後、コンゴ民主共和国の国境の町 Gisenyi に住む叔父にかくまわれ、そこではフランス語と Kinyarwanda が使用されていたが、叔父にはつねに英語で話しかけられていた。叔父を訪ねる人々は Kinyarwanda に似た ‘Kinyankole’ (Runyankole) を使用していたため、叔父とも Runyankole で話しはじめた。叔父に与えられた使い走りの仕事で 1996 年まで荷物を運んでいたが、荷物の中の銃が見つかり、ルワンダ愛国戦線 (RPF) の兵士に捕らえられ、収容所でひどい仕打ちを受けることになった。収容所では、Runyankole で尋問を受け、Kinyarwanda の言語

能力が劣っていたために他国の少年兵と疑われていた。その後、数年間、Kigaliの近くの刑務所に入り、強制労働の指示がKinyankoleであったためにある程度、習得することになった。強制的に歌わされた労働歌はKinyarwandaとSwahiliだった。4年後の2001年に正体不明の女性の訪問を受け、兵士から女性と一緒に逃げるように指示され、刑務所を脱出することが出来た。

内務省による尋問では、母語を聞かれたが「母親の言葉」と間違えてKinyarwandaと答えたためにKinyarwandaの通訳者がついたが、彼にはその言語能力が十分になかった。彼はRunyankoleも話せると述べたところ、両言語を話せる通訳者がきたが、しばしば英語にコードスイッチングすることとなった。Josephの母語と国籍を確立することが出来ず、ルワンダからの難民申請は却下された。

上申書から浮かび上がるJosephの言語レパトリーは、出身国の「公用語」「共通語」とも、言語能力と結びついた「母語」とも、関連づけることが出来ない。こうした事情はイギリス内務省の難民審査官だけでなく、ルワンダの収容所の審査官にとっても同じであり、単に誤解されるにとどまらず生命の危機に直面した原因となっている。

Josephの場合には幼少期からルワンダの国境を行き来して暮らしていたその特異な言語環境によって複雑なレパトリーが形成された極端な例であることに疑いがないが、こうした言語レパトリーの特徴は程度の差はあれ、グローバル化のなかを移動する人々に共通していると思われる。Vertovec(2007)は、こうした多様性を従来の多様性と区別して超多様性superdiversityと呼んでいる。母語の言語能力を前提としたり、居住地域や出身地域の人々の標準的な言語規範を前提とするような、伝統的な社会言語学ではままならないことは明らかである。彼らの言語使用を理解しようとするとき、その歴史的な個別性とそれぞれが言語を選び習得していく主体性こそがキーワードとなるだろう。

2.2. 言語学的エスノグラフィーにみるパラダイム・シフト

以上のようなイギリスにおける言語学的エスノグラフィーの発達のきっかけとなった、言語学と社会学の領域における 20 世紀後半からの変化について、Rampton et al. (2014) はポスト構造主義、グローバル化による現実世界から学問世界への挑戦、イギリスにおける研究調査助成におけるモード 2 の学際性という 3 つのパラダイム・シフトを指摘する。

彼らによれば、ポスト構造主義の発展にともない、形式的な言語学が重視する体系性よりも、言語の使用主体、断片性、偶然性、さらには場面に埋め込まれた知識とその多元性が注目されるようになる。さらに「社会」「国家」「コミュニティ」「ジェンダー」「エスニシティ」などの概念自体が再検討され、これらの概念自体が談話とイデオロギーにおいて生産された社会的構築物であると主張されるに至ったという。こうした再検討の動きは、移動する人々の増加とコミュニケーション技術の発展によるグローバル化がもたらした多様性という現実世界からの挑戦を受けることによってさらに拡大している。加えて、イギリスでは、学問領域内における学際性を唱ったモード 1 に対して、社会的、技術的、政策的に関連している「現実世界」のイシューを出発点とするモード 2 の研究助成が注目され、そうした現実社会の課題の解決のために学問領域を越えた多様な理論や方法の応用が求められるようになったことを指摘した (Rampton et al., 2014: 5)。

さらに Rampton et al. (2014) では、エスノグラフィーと言語学の関係を次のようにまとめる。「知識の社会的、歴史的な個別性 particularity に対する意識が高くなるにつれて、調査者自身の立ち位置に関する対話と内省的認識のもとで築かれてきた、観察の方法としてのエスノグラフィーは根本的に重要なものとなっている。他方で、言語学は操作的なりソースとして、社会関係の実践的な交渉の最も小さな動きにも光を当てられるその有効性は理解されるが、解釈科学から客観的科学への道筋を指し示すものとしては尊敬されなくなった。」(Rampton et al., 2014: 6)

つまり、人文科学のなかで客観的な科学となりうる優等生として尊敬されてきた言語学よりも、言語学的方法を備えたエスノグラフィーが重視されるようになったとして、言語学的エスノグラフィーの特徴を次のように

まとめている。

- (1) ダイナミックな偶然性、人間の主体性と解釈を考慮に入れること：重要な概念としては推論(inferencing)、指標性(indexicality)、相互反映性(reflexivity)など。
- (2) われわれの実践的な意識と日常的な活動に根付いた規則性のパターンや期待を指し示す慣習や制度の構造を考慮すること。
- (3) 実証的な記述の時空の地平を拡張し、個々のコミュニケーションの encounters を越えた、また事前、事後の複数の歴史、結果と物質的なプロセスを考慮すること：たとえば、マルチモダリティ、テキストの軌道、さまざまなスケールの文脈のプロセスなどを扱う。

2.3. 接触場面研究との親近性

基底規範 base norm は、「当該のコミュニケーション場面にとって正しい規則として話し手に判断された規則の束 rules」(Neustupný, 1985b: 162)と定義づけられ、言語に対する行動を説明する言語管理プロセスの最も根底にある概念であるが、そこには参加者の主体性が表現されている。つまり基底規範とは、当該のコミュニケーション場面のインプットから参加者が焦点を当てた「場面」の構成要素の規則の束であり、客観性を帯びた場面の属性によって想定される規範とは異なる。さらに言えば、こうした主体性を重視した社会言語学のアプローチは、日本の社会言語学において重要な貢献をしてきた、場面、個人の属性、社会階層、レジスターなど、平均化された基準から言語変種を考察するアプローチ(cf. 真田、2006)とも異なる。

ところで、前節で紹介した Rampton et al. (2014) が主張する言語学的エスノグラフィーの3つの特徴は多くの点で接触場面研究の関心の持ち方と重なっている。たとえば、ディスコースを重視してインターアクションの参加者自身が経験する言語問題を明らかにしようとする点では(1)と、接触場面の参加者間の規範構築における逸脱を含めたさまざまなバリエーションに注目してきた点では(2)と、そして管理の軌道をとらえることがか

ら接触場面に向かう言語管理を明らかにしようとする最近の動向では(3)と、言語学的エスノグラフィーとの親近性を示している。

ただし、言語学的エスノグラフィーは、解釈的なアプローチを重視し、指標性とかかわって地域からグローバル、個人から国家までのスケール(レベル)を行き来することで、移動する人々の言語使用の意味・価値の重層性を分析しようとする。それに対して、接触場面研究は、言語に向かう認知的な行動のプロセスを重視し、個人の主体的な管理プロセスを提案した。この解釈的なアプローチと認知的プロセスとは確かに異なるが、決して矛盾するものではない。相互行為においては、解釈プロセスと認知的な管理プロセスは個人の中で相補うように働いている可能性もある。

接触場面研究に限って言うならば、認知的な行動の前提となる相互行為上の解釈を分析に取り込むことは接触場面の個別性、具体性をさらに追求する助けになるように思われる。言語管理のプロセスは、オーソドックスなプロセス・モデル(Neustupný, 1994)が唯一のプロセスではない。言語管理のプロセスには、発話の指標性にかかわる逸脱の留意とそのメタ・メッセージの解釈と評価のプロセスが含まれているはずである。さらに相互反映性を考慮に入れることによって調整計画とその実施が相互構築的に実現されていくプロセスについても扱うことができるようになると考えられる。

以上、本節では、接触場面研究が伝統的な社会言語学とは異なる潮流から発展してきていること、そしてその潮流にある言語学的エスノグラフィーとの親近性を指摘し、さらに言語学的エスノグラフィーがとりあげてきた領域の一部を取り込む可能性について論じた。接触場面研究はここ10年近く、接触場面の変容という新しく生じていた言語問題の側面を取り上げ、研究してきた(cf. 村岡・ファン・高・石田, 2007)が、研究のプログラムの組み直しができる新たな段階を迎えているとすることが出来る。

3. 言語バイオグラフィーによる評価の分析

本稿では、移動する人々が自分自身の言語使用や周囲の言語環境に対して行ってきた言語管理の軌道のうち、言語管理プロセスの評価段階³⁾に焦

点を当てて論じる。

インタラクティブ性としてみると、言語管理における評価はさらにつぎの3つの局面においてとらえることができる。

(1) インタラクティブ性上に見られる評価 (evaluation in interaction)

インタラクティブ性の当該場面では、参加者である話し手は自身の言語使用の意図がどのように相手に理解されるかを予想し、相手もまた話し手の意図を文脈化の合図等をもとに推測し、解釈していく(指標性、相互反映性)⁴⁾。参加者の評価は、こうした解釈の基礎になる認知的活動として位置づけられるが、ある場合には評価的表現によって直接に表出され、ある場合には微細な相互行為⁵⁾の連鎖のなかに埋め込まれ、イントネーション、周辺言語、笑い、非言語動作、表情として、また発話連鎖の重なり、ポーズ、繰り返し、修復などが手懸かりとなる(cf. Gumperz, 1982)。また、どのような行動にも評価が見られない場合にはフォローアップ・インタビューを実施することによって、参加者自身からインタラクティブ性の途中で何をどのように評価していたかが報告される場合がある。

(2) インタラクティブ性に関して語られる評価 (evaluation on interaction)

評価はインタラクティブ性中よりも、その前後でよく表現される。それは、参加の前にその場面の予想可能なイベント・タイプについての知識を活性化させ、これから予想できる事柄について評価を語る場合もあれば、参加の後に表出される感想や意味づけなどの評価の場合も含まれる。他方で、当該の参加場面とは直接に関係なく、いわば相互行為の外から語られる場合がある。たとえば、イベント・タイプについての社会通念、イデオロギー、話し手のインタレストに基づいて語られる評価も、普遍的に観察することができる。

(3) インタラクティブ性に向けて保持される評価 (evaluation towards interaction)

当該のインタラクティブ性が経験された後で、自分や相手の言語行動に対して解釈をし、自らの言語生活上の重要度の点から位置づけを行う言語管理が蓄積されていくとき、言い換えると、言語管理の軌道が形成されていくとき、そこでのインタラクティブ性に関して語られる評価は、一定の

方向で整理され、将来、同様の場面に遭遇したときの行動の原則として保持されることがあるだろう。つまりそうした評価はインターアクションの方向づけをする役割を果たし、接触場面に向かう言語管理の一部として働くものと思われる。

以上の3種類の評価は、実際の相互行為を対象にした場合と、本稿で扱う言語バイオグラフィー・インタビューを対象とした場合とでは、異なる現れ方をする。

言語バイオグラフィー・インタビュー (Nekvapil, 2004; 村岡, 2010) では、調査協力者の言語習得・言語使用の経歴が質問されていくなかで、その「事実的な事柄」、「主観的な事柄」が語りのなかに現れる。それと同時に、インタビューという相互行為の中では調査協力者が何をどのように語り、また語らなかったかについての「テキスト・レベルの事柄」も観察することが出来る。

先の評価の3分類に関連づけるとすれば、その場で参加するインターアクションが存在していないこうしたインタビューにおいては、言語習慣に基づいた「インターアクションに向けて保持される評価」が現れやすいと言えるだろう。さらに、過去の具体的なインターアクションのエピソードが提供される場合には「インターアクションに関して語られる評価」が現れる。また、そうした評価がインタビューのなかでどのように位置づけられ、構築されていたかという評価の文脈を明らかにすることで、評価の意味を解釈することが可能になるものと思われる。

以上の評価の分析枠組を用いながら、次節から外国人住民の言語バイオグラフィーの語りから、習慣化された言語管理の1つとして相互行為に向けて保持される評価をとりあげ、そうした評価がどのような言語管理の軌道から形成されるに至ったかを記述していく。

4. 調査協力者の言語バイオグラフィー

4.1. 調査の概要

調査は現在も継続中であるが、本稿では2013年から2015年にかけて調

表1 調査協力者のプロフィール

協力者	KR	JBR	CH
調査年月	2015年7月	2015年1月	2013年7月
出身国	韓国	ブラジル	中国
来日	2005年	1995年	2007年
使用言語	韓国語、日本語、英語	ポルトガル語、日本語	中国語、日本語、英語
年齢、性別、職業・身分、家族	30代前半、男性、大学生、韓国人配偶者と子ども一人	40代前半、女性、スーパーマーケット経営、ブラジル人配偶者	30代前半、女性、会社員、中国人配偶者

査した協力者3名の語り⁶⁾を取り上げる(表1)。これら3名は英語を母語としない日本に住む外国人住民であり、滞在歴は長い人で20年、短い人で6年となるが、それぞれの環境で日本人との相互行為を経験してきたと言える。

調査においては、主として日本語で言語バイオグラフィー・インタビューを行い、補足的にそれまでの言語使用について問う質問紙調査も行った。インタビューの時間は協力者によって異なる。KR、CHについては1週間の間隔をおいて2回実施し、各回とも1時間から1時間半、自身の言語使用と過去の経験について語ってもらった。JBRについては1回のみで2時間のインタビューを行った。JBRのインタビューのときは連携研究者と2名で行った。インタビューはICレコーダで録音され、後にすべて文字化した。

まずは、インタビューをもとに各調査協力者の事実的事柄を再構成する。

4.2. KRの経歴と言語学習歴

KRは、1984年に韓国の仁川で育ち、高校までは真面目とはいえなかったが、サッカーだけは好きでクラブに入っていた。当時の学校教育では体

罰がふつうに行われていたという。IT系の大学に入学したが、授業についていく自信がなく半年で退学し、兵役で2年間入隊した。除隊後、会社に就職する一方で、通っていた教会の日本語講座の韓国人の先生が使えそうな日本語を教えてくれて興味を抱いた。会社が倒産し解雇されたことがきっかけとなって、2007年に東京に語学留学し、1年で日本語能力試験N1に合格した。1年先に日本の大学に入学することを決めて勉強を続け、2009年に首都圏の大学に入学した。その後、KRは日本語学校に通っていたときに知り合った韓国人女性と結婚したが、東日本大震災の2011年に経済的理由と妊娠していた妻のために休学をして二人で帰国し、就職した。2014年に復学し、調査時には生まれた子供と三人で暮らしている。妻はほとんど家にいて日本語を使うことが少ないため、通っている教会でのつきあいや保育所での日本語でのやりとりの多くはKRが行っている。

以上のようにKRは韓国の会社の倒産や東日本大震災などの経済的な状況や自然災害に左右されながら韓国と日本を行き来してきたが、日本と韓国の社会がよく似ていて生活する上ではほとんど変わりがないと述べて、日本での生活についてとくに大きな問題を語ることはなかった。

4.3. JBRの経歴と言語学習歴

JBRは1975年にブラジル、サンパウロ市で生まれた。父は日系1世で、母は日系2世であったため、幼い頃には父から単語程度の日本語を教えてもらったことがある。1990年の出入国管理令の改正にともない日系3世までの就労が可能になった直後の1991年、両親と妹(当時8才)が渡日した。JBRは1997年、22才のときに来日し、東海地域で日系ブラジル人が経営する食品会社に事務職として就職した。社長や日本人社員に助けをもらい、仕事をしながら独学で日本語を学んだため、正規の日本語授業を受けたことがない。友達のブラジル人仲間の男性と知り合い、結婚した。夫は工場従業員だった。その後、食品会社の業績が振るわなくなった2009年に退職し、2011年から夫といっしょに南米の食材を扱うスーパーマーケットを開業した。両親や兄弟は2009年までにブラジルに帰国している。食品の注文やレジでの対応など、日本語が必要な場面ではもっぱらJBRが行って

いるが、現在は日本語よりポルトガル語を使用するほうが多い。南米出身の外国人以外の外国人が来る場合には英語が出来ないので日本語で対応すると言う。

以上のように、JBRの経歴と言語使用は、22才で来日して食品会社で働きながら日本語を学んでいた時期と、夫と二人で店を立ち上げてから経営を続けている現在までの時期とに大きく分かれ、現在はポルトガル語中心に生活していることが明らかになった。

4.4. CHの経歴と言語学習歴

CHは1983年に中国黒竜江省に生まれた。子供の頃、日本語が出来る祖父に日本語の単語を教えてもらったことがあった。2002年、教師を目指して中国の師範大学に日本語専攻で入学し、初めて日本語を学んだ。日本語を専攻したのは、教師になるに当たって英語では競争が多く難しいと考えたからだ。大学を卒業してすぐ、2006年に来日し、協定校だった新潟の大学に研究生として1年在籍した。2007年、首都圏の大学に研究生として入学し、半年後に大学院修士課程に進学した。日本文学が専攻だった。2011年の東日本大震災のときに一時帰国したが、まもなく戻り、修士課程を修了した。2012年に中国人男性と知り合い結婚した。外国人研修生の受入れに関わる仕事や中国語教師をしながら、現在は首都圏の地方都市に在住している。

以上のように、CHは4つの地域を移動しながら日本語を使用してきた。中国の大学で日本語を専攻したことから始まり、新潟の大学の研究生時代、首都圏の大学での修士課程の時代、さらに首都圏の地方都市で中国人の夫と暮らしながら中国語と日本語の両言語を使用して生活している現在というように生活圏を分けることができる。留学によって日本に移動し、長期滞在に移行する外国人住民の1つのパターンと言える(cf. 鄒、2013)。

5. インターアクションに向けて保持される評価

本節では、第3節で述べたインターアクションに向けて保持されていると解釈可能な評価から言語使用の原則またはストラテジーを取り出し、そ

うした原則やストラテジーがどのような管理の軌道によって形成されたのかを分析する。ここで言う原則とストラテジーとは、類型論的なアプローチによって提唱される階層の1つであり、原則はストラテジーよりも広範囲に適用可能な言語についての態度であり、ストラテジーは相対的に限定された場面に適用される態度を指す(ネウストプニー、1989; 村岡、2010)。これらの言語に対する態度の特徴は、具体的な接触場面でその都度、規則の束となって適用される規範とは異なり、日本語使用や日本語学習についてこれまで自分自身で信じるようになった事柄からなり、繰り返し語られ、比較的に安定した語りからなる。こうした態度にはインターアクションに向けてどのように言語を使用するか、あるいは将来のインターアクションのためにどのように言語を学習すべきかに関する評価が見られる。

以上のような評価は、インターアクションのエピソードが言及される場合(KR)と言及されない場合(JBRとCH)とがあった。エピソードが報告されなかった場合は、テキスト・レベルでの分析が必要になる。以下、5.1では具体的なエピソードが言及されたKRの事例を扱い、5.2では言及されなかったJBRとCHの事例を分析し、言語管理の軌道の解釈を試みる。

5.1. インターアクションのエピソードが言及された場合

5.1.1. KRの事例

(1) 接触場面のインターアクションに向けて保持される評価: ため口に対する否定的評価

インタビューでは、質問紙を使い、自分自身で習得するのが早いと感じたか遅いと感じたかを15項目に渡って答えてもらった。そのなかでKRは日本語と韓国語には意味の微妙な違いがあり、その意味領域や指標性についての問題⁷⁾を述べたり、イントネーションの習得が今現在の最大の課題であること、など日本語習得上のさまざまな問題について語っている。言い換えれば、KRは日本語の言語レパートリーを拡大するために、日本語と韓国語の運用の違いを比較しながら、自分の日本語使用のさまざまな面

について否定的に評価し、習得のための調整を体系的に行う努力をしていると考えられる。

インタビューにおいて特に興味深かったのは、「くだけたスタイル」に関して質問したときに限って、例1のようにため口は「僕はないです」と否定的に評価し、出来るだけ使用しないという言語レパートリーに制限を加えようとする原則を語ったことであった。

例1: KRによる「くだけたスタイル」に対する評価

ER: くだけたスタイル。

KR: くだけたって何ですか？

ER: うんと、ため口とか。

KR: ま、僕はないです。韓国は上下関係厳しいんで。

ER: 使わないようにしてるんですか？

KR: はい。僕、一応年、自分より年上が、あの、ため口絶対しないです。それは韓国でも日本でも同じで。

ER: 下の人にはどうですか？

KR: 下の人にもしないです。向こうがしなかったらこっちもしないで、僕が年下に、たぶんして来たらこっちもします。

ER: 使おうと思えば使えるんですね。

KR: 使おうと思えば使えます。

KRによれば、韓国語でも日本語でも年上の相手にはため口を使わないが、それだけでなく年下の相手にも自分からは使わないようにしていることが語られている。ため口使用に対する否定的評価について、例2でKRが述べた理由は、それがもともと韓国にいたときから感じていたものであるということであった。

例2: KRによる「くだけたスタイル」に対する否定的評価の理由

ER: くだけたスタイル、ため口に対してはどっちかっていうと否定的なんですね。

KR: 否定・・まあどっちかっていうと否定ですね。だって、まあ、そう考え、考えないようにしようって思ってるんですけど、つい。もう 30 年間その、厳しい上下関係で生活してきたんで、まあ 10 歳のときからやっぱり。急にため口されたらきっと嫌な気持ちはなるんでしょし、やめとこやめとこって思いかけてるから、何も言わないんですけども、まあ、どっちかっていうと否定的ですね。

例 2 を見ると、KR は「厳しい上下関係」を指標するため口そのものについて否定的であり、それは韓国語においても日本語においても彼の原則となっていると解釈することができる。

(2) 言及されたインターアクションのエピソードに対する評価

KR が言うように、ため口を使わないという原則が韓国にいた頃からのものであったとしても、日本語によるため口にも適用される否定的評価と原則が、同じ理由によるとは必ずしも言えない。実際に、インタビューがさらに日本語でのため口について追加質問をしたときに、例 3 のエピソードが語られ、否定的評価のべつな理由が示唆された。

例 3: KR による日本語での「ため口」に対する否定的評価の理由

KR: でも、外国人だからこういうのはあるんですよ。外国人だから、ため口みたいな。ため口しないと聞き取れないんだろうとか、それも実際ありますし、バイトしてるとなんか、日本の方のバイトさんと、外国人のバイトさんと名札見ればすぐわかるんで、その、水商売の近くにあるバイト、コンビニでもありますし、で、人によってしゃべり方の違うようなお客さんもいるわけで、ま、それで否定的になったかもしれないです。

ため口は、参加者が相互に使用する場合には we-code (Gumperz, 1982) の 1 つのタイプとして人間関係の親しさを表示する機能をもつが、KR が

語っているように、一方的に使用される場合には上下関係を表示する機能をもつ。通常、店員と客の関係では特別敬語(または店員のレジスター)とですます体が規範と考えられるが、KRのエピソードでは客がですます体からだ体へとスタイル・シフトをしたことになり、上下関係が最大化している。KRにとっては、日本人が自分を外国人として見下すような、上下関係を強く指標するものであると考えたものと思われる。言い換えれば、ここで語られたインターアクションのエピソードは、韓国の厳しい上下関係の場合とは異なっており、接触場面に適用された権力作用(山田、1999)の性質を帯びていると言える。

(3) 言語管理の軌道

KRは韓日の社会を行き来しながら、どちらの社会も似たようなものであると述べ、とくにどちらかを美化したりけなしたりすることがなかった。

KRにとってため口は、どちらの社会においても望ましいとは思えない人間関係を指標するものとして理解されている。ため口は、第1には韓国にいた頃から上下関係を表すものとして、第2にはホスト社会の日本人側が外国人に対してふるう権力作用を表すものとして、否定的に評価されていた。

ただし、KRは第2の点に関して日本人全体に敷衍しようとはしていない。インタビュアーがため口は差別的だと感じるかと聞いたのに対して、KRは次のように答えている。

例4: KRによる「ため口」に対する原則

ER: うんそれはなんか差別的なんだよね。すごく。ていう感じがするんでしょ?

KR: そんな大きなこととは思ってないですけど。

ER: 日本人の方が偉いぞみたいな言い方になるんでしょ、おじさんとかが。

KR: はい、でも、その人がいる、全体をそう見るっていう過ちはしな

いんで。

ER: 生活していく上でそういう色々いいこともあり、悪いこともあると思いますけど、その時はケースバイケースで考えてるんですか？

KR: あ、自分宗教やってるんで、宗教的考えも交じってきますが。基本的にはケースバイケースで、自分が、全力を尽くして、努力すれば、幸いは訪れるみたいな基本的はそういう考え方です。

つまり、KR による日本語のため口に対する否定的評価は、権力作用をふるう一部の日本人の使用に対してのものであり、KR 自身のため口の回避は、こうした権力関係をふるう人々の言語の使い方を自分自身では回避する原則と見なすことができるだろう。

KR は日本語による言語レパートリーの拡大を積極的に試みているが、ため口とそれが指標する人間関係についてはどちらの言語でも回避することを言語使用の原則として確立しているものと思われる。

5.2. インターアクションのエピソードが言及されなかった場合

5.2.1. JBR の事例

(1) 2つの対比的な評価

JBR との言語バイオグラフィー・インタビューにおいては、インターアクションのエピソードが語られなかっただけでなく、言語使用に関する原則も語られていない。日本語の書き言葉が得意とは言えない JBR が食品業者とのやりとりでメールやファックスを受け取ったときには、振り仮名をふることで理解しやすくなること、自分から送る場合にはローマ字で送ること、など場面ごとのストラテジーについては聞くことが出来たが、自分の日本語使用について原則的な話をすることはなかった。JBR の言葉を借りれば、「今はほとんどポルトガル語を使って生活をしている」し、この地域ではブラジル人同士のネットワークもあり、ポルトガル語の翻訳や通訳などの公的な言語サービスも発展していて「日本語が出来なくても困らな

い」のである。言い換えると、4.3の経歴で述べたように、JBRはこれまでの日本の生活の中で必要に応じて求められる日本語を獲得してきたが、食品会社を退職してからは特に、南米の食品を扱う店の経営が生活の大半を占め、ポルトガル語によるネットワークのなかで暮らしていると言えるだろう。

言語使用に関する原則が語られなかったとすれば、JBRはインタビューにおいてそれ以外のどのような内容について語ったのだろうか。こうした観点からJBRの語りをたどると、そこには2種類の対比が目立つ。

1つは、事実レベルの記述で明らかにしたように、来日後の食品会社時代の「昔」と店の経営を開始してからの「今」の対比である。「社長に日本語を教えてもらったのが一番良かった」、「日本人の社員がいっしょだったので日本語はだいたいわかった」、「前は新しく聞いた言葉を覚えていたが、今はしていない」、「昔は会社の日系の同僚とつきあうことが多かったが、今は忙しくてつきあう時間がない」、「前は日本人とつきあうときはいろいろ気をつけていたが、今は仕事だけなので気をつけることはない」、など、日本語使用が生活の一部にあった「昔」と、ポルトガル語が中心となった「今」とが時間軸に沿って対比され語られていた。さらに、一番楽しかったのは食品会社がもっとも元気のあった頃、社員みんなで会社の成功を祝ったときであり、一番苦しかったのは退職して店を開業し始めた頃であるというように、「昔」の生活に対しては肯定的な評価が多く、「今」の生活に対しては肯定的評価が少ない。こうした対比がJBRの言語管理の軌道とどのように交差するかについては後に触れることとする。

2つ目の対比は、工場で働く外国人の日本語と、食品会社の事務職をしていた自分が身につけた日本語に関するもので、JBRの語りには工場で働く外国人の日本語に対する否定的評価と、自分自身がそうした日本語のバリエーションを習得していないことについての言及が2度繰り返された。

JBRは、スーパーマーケットの営業や店番などで日本語が必要なときは自分が話し、夫は話さないことを述べた後に、例5のように夫の日本語について付け加えている。工場の言葉使いについての質問に答えた後にも、例6のように工場の言葉を自分は知らないことを繰り返している。

例 5: JBR による工場の言葉に対する否定的評価

JBR: 工場に行ったから変な言葉、汚い言葉を旦那さんは覚えた。

例 6: JBR による工場の言葉に対する無知の報告

JBR: 私はちょっと恥ずかしいですね、出稼ぎに来た人はみんな工場に行ったと思っているから。でも、私は工場で使う言葉を知らないから。

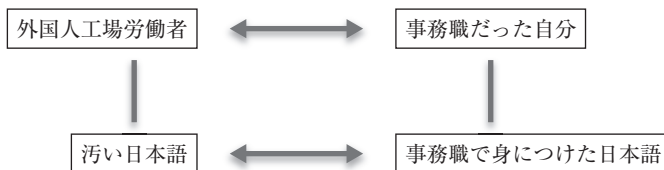
例 5 において JBR は、工場で使われる日本語が「汚い」と述べ、工場で働く外国人の日本語を否定的に評価している。また、例 6 では、そうした汚い日本語を使う工場の外国人と自分が同一視されることが「恥ずかしい」と述べ、日本人から同一視される経験を否定的に評価している。

日本語のバリエーションの 1 つに過ぎない工場労働者の外国人の日本語が「汚い」というのは、JBR 自身の主観的な評価である。なぜそのような否定的評価が形成されるに至ったのか、その言語管理の軌道について手懸かりとなるエピソードについては、KR のケースとは異なり、JBR から語られることはなかった。そこで、次にインタビューという相互行為上の評価から考えていく。

(2) インタビューという相互行為に埋め込まれた評価

前節の例 5 と例 6 の否定的評価を述べた JBR の語りは、工場労働者の外国人と事務職であった自分、汚い日本語と事務職をしながら身につけた日本語、という対立図式で構成されている。

図 1 JBR による対立図式



JBR の不満は、ホスト社会の日本人にはこの関係が理解してもらえず、工場労働者の外国人と自分とが同一視されるという点にあった。否定的評価として用いられた「汚い日本語」という言葉は、工場労働者の外国人と自分との差別化を指標するための評価的表現であったと解釈できる。

こうした対立図式を念頭に置くとき、JBR の対比は、インタビュアーに対して自分を工場の外国人と同一視しないことを要請しようとしたものと考えられる。すでに述べたように JBR の住む外国人集住地域には、これまでも多くの研究者や外国人支援に関心をもつ活動家が訪れている⁸⁾。調査者が市の国際交流協会の関係者から紹介を受けて JBR にインタビューをすることが出来たように、これまでも同様の研究者が JBR を訪ねた可能性はあるだろう。もしそこで JBR が、研究者たちの研究対象が労働者の外国人であると思うことがあったとすれば、自分はそうした外国人ではなく、むしろホワイトカラーの側に近い外国人であることを示唆し、JBR に対するインタビュアーのスタンスの変更を求めようとしたことは大いにありうるように思われる。

さらに、例6に見られるように JBR の対比的な言及には過去の「恥ずかしい」経験が少なくなかったことを示唆する。JBR はまったく言及することはなかったが、来日してから町は住みやすくなったかどうかをたずねられて、以下の例7のように答えており、日本人住民との心理的距離が拡大していることがわかる。

例7: JBR によるブラジル人と日本人の関係に関する昔と今の比較

JBR: 昔の方がよかった。昔の方が悪いところもあるし良いところもあるけど、日本人が近かった。今は、昔ブラジル人が悪いことをしていたから日本人は後ろ向き。一部の人がいろんな悪いことしてた。車のローンを払わない、ガス代も払わない…ブラジル人だという嘘つきだと思う人もいる。みんなではないけど日本人は足が後ろになってる。退いている。

2009年に退職して会社の肩書きがなくなり、店の開業のために夫と努力

していた「一番苦しかった」時期に、JBR は毎日泣いていたことも語っており、否定的な評価が蓄積されたことは明らかであろう。

(3) JBR における「汚い日本語」の評価に至る言語管理の軌道

JBR は、工場労働者の外国人の日本語に対する否定的評価が形成されるきっかけとなった具体的なエピソードについては言及することがなかった。先述のように、食品会社の退職後に、工場労働者の外国人と同一視されるような経験の蓄積があったとすれば、それは言及したくない経験であっただろう。具体的なエピソードを語るかわりに提示された「汚い日本語」と自分との区別は、同一視されるのを回避するための有効な手段の1つとして安定的に保持されている態度であると考えられる。

以上のように JBR は、食品会社勤務からスーパーマーケット設立への生活環境の変化のなかで、一方では「汚い日本語」という否定的評価を形成することによって外国人工場労働者との差別化をはかって自尊心をまもり、他方では日本人との心理的距離が大きくなったことから日本語環境を縮小させポルトガル語環境を中心とする生活に移行していったものと考えられる。

5.2.2. CH の事例

(1) 接触場面のインタラクティブに向けて保持される評価：曖昧表現に対する肯定的評価

インタビューの中で日本語使用について何が難しかったかについて聞いていくと、CH は「結構です」や「いいですよ」の多義性、「はつもうで」の発音が2年も間違えていたこと、など答えてくれたが、さらに加えて自発的に例8のように付け加えて自分の意見を曖昧にする言い方をするようになったことを語っている。

例8: CH による日本語使用の曖昧表現の難しさ

CH: あと、ほんとに日本人の考え方ですね。やっぱり、最初は私はよく、「～と思います」「なにになにです」と言っていた。今はね

「うーん、どうだろうね」と言っている(笑)。「いいと思います」「いますぐ行きます」「東京に行きたいです」とか。今は「うーん行ったほうがいいのかな」って言って(笑)。

2回目のインタビューにおいても、例9のように同様の変化について語っており、自分の意見をはっきりと言わないことに対して肯定的な評価をしていると考えられる。

例9: CHによる曖昧表現使用に対する肯定的評価

ER: じゃCHさん自身は、7年8年経ってどうですか、ちょっと変わったんだな自分は変わったと思うことがありますか。

CH: 変わったんです、自分、はっきり(笑)。

ER: あそうですか。

CH: 前と全然違うんです。前はね、もっと、もっと中心、自分中心的。もっと、もっと、あー、自分のことしか考えていなかった(笑)。うん、最初はね。うん。あと言葉的にもだんだん変わってきて、最初はこのあいだも言ったように、

ER: そうですね。

CH: うん、なんかはっきり、なんかまっすぐっていう感じ。なんか、こう思います、こうです、とかね(笑)。今は、あんまりないじゃないかな(笑)。なんか、ああこうだなんて。

以上のように、以前と異なる曖昧表現の積極的な使用は、CHの日本語使用の原則になっていると考えることができる。

(2) 語りに埋め込まれ、散在するエピソードとその評価

CHは「変わったんです、自分、はっきり」と、話し方の変化を語ったが、どのようなエピソードや言語管理の軌道から形成されたのかについては、具体的には何も語らなかった。

4.4の経歴において述べたように、CHは日本語を使用するようになって

4つの場所を移動してきたが、そのなかで最初に日本に来て生活を始めた新潟の思い出が例10のように比較的によく語られていた。第3の移動先である首都圏の大学に来てからの経験については特に語られることはなかったし、現在の地方都市の生活は、中国人の配偶者との家庭生活があり、また仕事があるために、友人ネットワークが弱くなっているようであった。

例10: CHによる新潟での思い出

CH: 気持一、気持も、どうかな、でも最初から日本が好き(笑)、日本が好きだった、憧れて、4年間日本語を勉強して、こっちに来て、んー、なんかね、前新潟にいたときね、すごく留学生が少なかったんですよ、毎年なんか先生がわたしたちを連れてなんかスキーにいったりとか(うん)、佐渡島にいったりなんか旅行したりとかね、(うん)、なんか、逆に、なんか、東京のほうに、来るとね、違うんです。なので、人が多いから、なんかやっぱりもう、そのへんはね、自分、自分はね、その機会を探さない、なんか、ないかもしれない、うん。(うん)そのことが少し変わったかな。あとは人はね、やっぱり田舎の人がもっと情熱的(笑)、うん、そこは違うんです。だから東京の人ですと、やっぱり、みんな忙しいからね(xxx)うーん(笑)。

ER: 田舎とは違いますよね。

CH: だから私、田舎が好きなんです(笑)。基本的なのは変わってないです。ただ、地方差が出てきたんです。

例10ではまず、第1の場所である中国の大学で日本語を習い始めた頃からCHは日本に憧れていたことが語られている。第2の移動先の新潟については話題が2回出現している。ここでは引用しないが、1回目は水餃子の作り方を日本人の主婦に教えて交流が出来、日本語も使えたことについてであり、2回目は例10の場合で、新潟で先生がスキー旅行や佐渡旅行に連れて行ってくれたことについて肯定的な評価が語りの中で表出されている。

他方で、例10には新潟と東京(首都圏)の人の違いについても触れられている。東京では人が多く自分から機会を探さないと知り合いを作ることが出来ないのに対して、新潟(田舎)では情熱的であることが対比され、「私、田舎が好きなんです」とはっきりと肯定的評価が語られている。

滞在期間こそ1年に過ぎなかった新潟時代ではあるが、来日最初の1年であり、これだけの肯定的な評価が語られるとすれば、その間にCHのスタイルの変化も習得されたことは十分に推測できる。意見を明瞭に言わないスタイルは、心理的距離を作り衝突を避ける戦略である場合もあれば、相手との交話的なインターアクションを活発化させる戦略である場合もあるだろう。新潟での経験は「情熱的」な人々との交話的なインターアクションだったように思われる。

(3) CHの言語管理の軌道

以上のように、CHの間接的に意見を述べる話し方は、新潟での日本人との接触によって獲得されたものと解釈することが可能である。一方で、すでに指摘したように、例10には新潟と首都圏との相違もまた語られており、首都圏でのネットワーク作りの難しさが指摘されている。その後のスタイルの発展は首都圏では必ずしも希望通りには進まなかったように思われる。CHが相互行為に向けた評価として明確に述べたのは間接的な話し方についてのみであり、日本語の多様なスタイルの習得をさらに促すようなエピソードも評価も語られなかったことはそうした推測を支持している。ただし、例10では日本社会は基本的に変わっていない、変わったのは地域差であると語っており、CHが大学で日本語を習い始めたときの「あこがれ」の意識は今も持続していると解釈することもできるだろう。「あこがれ」の意識は第1の場所で生まれ、第2の場所である新潟では、日本人との接触で充足され、間接的な話し方も習得されたとすれば、言語管理の軌道はそこで停滞していると言えるかもしれない。第3と第4の首都圏の移動先でのCHの言語管理はどのように語られるようになるかは今後の調査を待つ必要がある。

6. まとめ

本稿では、言語学的エスノグラフィーと接触場面研究の親近性を指摘し、移動する人々としての外国人住民の言語バイオグラフィー・インタビューから、3名の調査協力者の語りのなかに現れた言語使用に関する原則と評価がどのような言語管理の軌道によって形成されてきたのかについて記述を試みた。

3名の調査協力者の言語バイオグラフィー・インタビューで明らかになった言語使用に対する評価と原則に焦点を当てることにより、経歴や言語学習の経験との関連性、インターアクションのエピソードとそこでの評価、さらにはインタビューという相互行為のなかでのメタ・メッセージや語られなかった経験の諸相とのかかわりを跡づけることが出来た。

本稿では言語バイオグラフィー・インタビューを採用したが、それ以外にも言語学的エスノグラフィーが推奨するフィールド調査、そのなかでの相互行為の談話データの収集などと合わせて調査を行うことも十分に考えられる。談話を含めたエスノグラフィーおよび通時的な視点を重視することにより、認知的なプロセス研究を中心的な課題としてきた接触場面研究は今後、飛躍的に前進していくものと期待される。

注

- 1) 本稿のもとになった調査は、JSPS 科学研究費補助金基盤研究(C) (代表者村岡英裕、課題番号 26370474)、および神田外語大学グローバルコミュニケーション研究所研究プロジェクト「多言語社会の言語政策に向けた言語管理研究」(代表 サウクエン・ファン)の支援を受けている。
- 2) Kinyarwanda はルワンダの公用語の1つで、人口の大部分の第1言語とみなされている。一方、Runyankole は Banyarwanda 族のディアスポラ言語の1つと考えられる (Blommaert, 2008: 8 注 8)。
- 3) 評価段階は、規範からの逸脱の留意のうち、どれが評価され、問題として顕在化されるかに関わると同時に、どの問題に対して、あるいはある問題のどの側面について評価することによって調整計画を立てるかというプロセスの出発点にもなる重要な段階として位置づけられる。
- 4) こうした相互行為上の評価は、会話分析における解釈作業のなかで頻繁に現れる。たとえば、細田 (2008) を参照のこと。
- 5) インターアクションと相互行為という用語はどちらも interaction をもとにす

る。ただし、インターアクションは、社会文化行動を含むことを強調してコミュニケーションと区別するために使用されてきた(Neustupný, 1994)。一方、相互行為は会話分析や言語人類学の研究者によって使用されている。本稿では、相互に交換可能な概念として扱うが、相互行為もインターアクションに含まれるものとする。

- 6) KR と JBR については H. Muraoka, “The Significance of norms in Language Management Theory: A Theoretical Review.” (口頭発表、Fourth International Language Management Symposium at Sophia University, 26–27 September 2015) で取り上げたが、本稿では大幅に加筆修正した。
- 7) KR は例をあげて、「テーブルって名前があっても、日本の方はテーブルを聞いて、えっと、なんて言いますかね、テーブルで聞いて感じることも、韓国人が聞いて感じることは、微妙に違う。そういうことです」とインタビューで述べている。
- 8) 様々な文献を示すことができるが、CH の匿名性を守るためにここでは文献名を挙げない。

参考文献

- 細田由利(2008)「『第二言語で話す』ということ：カタカナ英語の使用をめぐる」『社会言語科学』10巻、2号、146–157頁
- 高民定(2010)「接触場面の変容と研究方法の可能性を探って：韓国人が参加する接触場面の例を中心に」村岡英裕編『接触場面の変容と言語管理：接触場面の言語管理研究 vol. 8』千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書 228集、35–45頁
- 村岡英裕(2006)「接触場面における問題の類型」村岡英裕編『多文化共生社会における言語管理：接触場面の言語管理研究 vol. 4』千葉大学大学院社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書 129集、103–116頁
- 村岡英裕(2010)「接触場面における習慣化された言語管理はどのように記述されるべきか：類型論的アプローチについて」村岡英裕編『接触場面の変容と言語管理：接触場面の言語管理研究 vol. 8』千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書 228集、47–59頁
- 村岡英裕・ファンサウクエン・高民定・石田由美子(2007)「日本における多言語使用者の言語管理と日本語教育：「多言語社会」から「多言語使用者の社会」」『平成19年度日本語教育学会春季大会予稿集』桜美林大学、2007年5月26日–27日
- 真田信治(2006)『社会言語学の展望』くろしお出版
- 鄒曉依(2013)「接触場面に向かう外来性管理：中国人居住者の移動のライフストーリーに関する事例研究」『人文社会科学研究』27号、千葉大学大学院人文社会科学研究科、54–70頁

- 武内進一編 (2000) 『現代アフリカの紛争：歴史と主体』日本貿易振興機構アジア経済研究所
- 山田富秋 (1999) 「エスノメソドロジーからみた「言語問題」」『社会言語科学』2 巻、1 号、59-69 頁
- Blommaert, J. (2010) *The Sociolinguistics of Globalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Blommaert, J. (2008) Language, asylum, and the national order. *Working Papers in Urban Language & Literacies, Paper 50*, London: King's College.
- Duranti, A. (1987) *Linguistic Anthropology*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fan, S. K. (2015) Accustomed language management in contact situations between Cantonese speaking Hong Kong employers and their Filipino domestic helpers: A focus on norm selection. *Slovo a Slovesnost*, 76, pp. 83-106.
- Goodwin, C. & Goodwin, M. H. (1992) Assessments and the construction of context, In Duranti, A. & C. Goodwin (eds.), *Rethinking Context: Language as an Interactive Phenomenon* (pp. 147-190). Cambridge: Cambridge University Press.
- Gumperz, J. (1982) *Discourse Strategies*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hymes, D. H. (1974) *Foundations in sociolinguistics: An ethnographic approach*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Jernudd, B. H. and Neustupný, J. V. (1987) Language planning: For Whom? In Laforge, L. (ed.) *Proceedings of the International colloquium on Language Planning*. May 25-29, 1986, Ottawa. Les Presses de l'Universite Laval, pp. 69-84.
- Nekvapil, J. (2004) Language biographies and management summaries. In H. Muraoka (ed.), *Language Management in Contact Situations Vol. III. Report on the Research Projects No. 104*. Chiba: Chiba University, Gradual School of Social Sciences and Humanities, pp. 9-33.
- Neustupný, J. V. (1994) Problems of English contact discourse and language planning. In Kandiah, T. & J. Kwan-Terry (ed.), *English and language planning: A Southeast Asian contribution* (pp. 50-69). Singapore: Academic Press.
- Neustupný, J. V. (1985a) Language norms in Australian-Japanese contact situations. In Clyne, M. (ed.), *Australia, Meeting Place of Languages* (pp. 161-170). Pacific Linguistics.
- Neustupný, J. V. (1985b) Problems in Australian-Japanese contact situations. In Pride, J. B. (ed.), *Cross-cultural Encounters: Communication and Miscommunication* (pp. 44-84). Melbourne: River Seine.
- Rampton, B., Maybin, J. & Roberts, C. (2014) Methodological foundations in linguistic ethnography. *Working Papers in Urban Language & Literacies, Paper 125*.
- Rampton, J. (2005) *Crossing: Language & Ethnicity among Adolescents*. Manchester,

UK: St. Jerome Publishing.

Vertovec, S. (2007) *New Complexities of Cohesion in Britain: Super-diversity, Transnationalism and Civil-integration*. Commission on Integration and Cohesion. Queen's Printer and Controller of Her Majesty's Stationery Office.